■研究十二月往来〈321〉

ちと年寄りしくある女面再考
―待つ女と待てぬ女―

高桑　いづみ

以前、「銕仙」五二三号（二〇〇四年四月）に「昔語りをする老女」というタイトルで、世阿弥時代の能面と演出について書かせていただいたことがある。老人の姿で登場した《高砂》や《八島》の前シテが昔語りを聞かせるように、現在では若い女性の面をつけて登場する《井筒》などの曇能でも、前場は若くない女性が登場して昔語りをするのが旧来のかたちで、それが世阿弥の意図した夢幻能の前場だったのではないかという論を展開したのだが、世阿弥の改作した《通盛》では前場のツレが「竜女変成と聞く時は。姥も頼もしや。」と謡い、《通小町》でも、僧の元へ木の実を届けるツレが名を問われて「市原野べに住む姥」と答えること、『舞芸六輪次第』の《もとめつか》の項で前シテに「深井」を用いたという記述があり、観世宗家には十世重成が河内に若女面を打たせるまで若い女性の面がなかったらしいこと、大成版の前付けでも「面―若女又ハ深井、小面」と書かれた曇能が多いことなどを論拠とした。なによりも重要視したかったのが『申楽談義』第二十二条に書かれた次の記事である。

近比、愛知打とて、座禅院の内の者也。女の面の上手也。…　中略　…　この座のちと年寄りしくある面、愛知打也。世子、女能には是を着られし也

「愛知（越智）といえば著名な面打ちだが、彼の打った中年女性の面を世阿弥は愛用していたらしい。現在、観世宗家に伝わる深井面がそれと比定されているのだが、晩年に入手したこの面を、世阿弥はどの曲のどの場面に用いたのだろうか。たとえば《井筒》の後場にも用いたのだろうか。若々しい女性が歌いあげる恋ではなく、さまざまな思いを重ねた女性が吐露する恋の深さや人生の重み。それが世阿弥の意図だったとすれば、夢幻能のイメージはかなり変わってしまう。」そう前稿に書いた。その後、能楽座のパンフレットなどにも似た様なことを書き、男を待つ間に年を重ねた女、《井筒》の構想の元になったのが「ちと年寄りしくある面」だったのだろうと推測したのだが、世阿弥はそこからさらに進んだのではないか。最近そう考えるようになった。

《井筒》の女には待ちつづける心のゆとりがあった。彼女は待ちながら、幼いころから続く長い長いふたりの物語をなんども思い返していただろう。「クリ・サシ・クセ」として旅の僧にも聞かせる物語は、「昔在原の中将。年経てここに石の上」と始まり、「その頃は紀の有常が娘と契り」と夫婦の思い出を語りながら「昔この国に。住む人のありけるが」、と幼い頃へ時間を遡らせてプロポーズの歌に至る。心の動きそのままに思いが思いを呼び、根源まで遡る構成で綴られている。ひところ《井筒》の典拠とされた『伊勢物語』二十四段の物語を加味すると《井筒》の女は「待てぬ女」になってしまうのだが、別の男と新枕を交わそうとした三年めの夜、業平を忘れられずに泉のほとりで亡くなってしまう二十四段の女の姿は《井筒》の構想とは異なりそうだし、これもひところはやったが、嫉妬した女の話を聞かせる間狂言はさらに世阿弥の意図とは無関係である。思い出に浸りながら、「待つ」行為そのものと化していた《井筒》の女は、あるときふと「生ひにけらしな。老いにけるぞや」と気づく。その姿は若くはない。

晩年、世阿弥は待ちくたびれて亡くなった「待てぬ」女の能も書いた。《砧》である。登場して

それ鴛鴦の衾の下には。立ち去る思ひを悲しみ。比目の枕の上には波を隔つる愁

ひあり。

と嘆く《砧》の女には、夫と過ごした日々を懐かしく思い返すゆとりはない。久しぶりに対面した侍女に向けた第一声は「珍しながら怨めしや」。夫への猜疑心で固まったまま、シテは侍女にも向かっている。初同で謡われる「思ひ出は身に残り昔は変り跡もなし」でも、「今」に執着し、思い詰めて周りが見えなくなった女性の姿が描かれるだけ。砧ノ段の前に謡われる[サシ]

牡鹿の声も心凄く。見ぬ山風を送り来て。
梢はいづれ一葉散る。空すさましき月影
の軒の忍に映ろひて……

では、思いの強さに押しつぶされてぽっかり穴のあいた彼女の心を梢のみが黒々と残る樹木の姿に重ね、そこに煌々と月が照らすシュールな心象風景を描き出している。

夢幻能と現在能、伊勢物語と市井の話と設定を変えて、「待つ女」の心理を正反対の方向から描いた点は興味を引く。二曲とも『申楽談儀』になって初めて名前があがるのでどちらが先行するか断定はできないのだが、応永三十五年の能番組に「業平」と書かれた作品が《井筒》だとしたら、《砧》よりほんの少し早く構想された可能性もあるだろう。

《砧》には典拠がない。砧ノ段では中国前漢の武将蘇武の故事に基づいて砧・音・風・衣・契りと自由連想のように音とコトバを連ねているが、《井筒》のような核となる物語があるわけではない。典拠があるとしたら、それが「ちと年寄りしくある女面」だったのではないだろうか。この女面を眺めながら、巷でときおり耳にしたであろう女の物語をふくらませたのが《砧》だったとしたら・・・「静成し夜、砧の能の節を聞しに、かやうの能の味はひは、末の世に知人有まじければ、書き置くも物くさき」とつぶやいた心の内に、発想のオリジナリティ、女の心の闇を現在能として描く新たな境地への自負と不安が垣間見える、とときおり指摘されるが、そこに面に触発された特殊な事情もよぎった、そう考えてみるのもおもしろそうだ。

面の使用は演出上の問題、と片付けられがちである。たしかに、《井筒》で十寸髪を附けたのは室町時代後期の演出であって世阿弥の意図ではない。だが、世阿弥たち能作者が曲想を練るとき、手近にある面から一切インスピレーションを受けなかっただろうか。《井筒》と《砧》、細やかな女性の心理を描く作品が晩年に誕生したことと、「ちと年寄りしくある女面」の入手は切り離して考えにくい。現在では《砧》を老女物に準じて大切にする流儀もあり、演出上まったく異なるイメージを抱いてしまう二曲だが、世阿弥の中では「ちと年寄りしくある女面」を介在して両者はつながっていたのかもしれない。「ちと年寄りしくある女面」は待つ女にも待てぬ女にも、後場の凄惨な地獄の責め苦にも耐えうる確かな表情を備えていたのだろう。

（東京文化財研究所無形文化遺産部）